

科学研究費成果報告書「近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築」(基盤研究(B)(1)、代表者伊藤隆平成15・16年度、代表者伊藤隆、課題番号:15330024)より

8. 松崎 昭一氏、桑野 眞暉子氏

まつざき・しょういち 元読売新聞社記者

くわの・まきこ オリエンタルランド総務部業務グループ係長

日時: 2004年11月16日

出席者: 伊藤隆 鹿島晶子 季武嘉也 萩谷茂行 有馬学 茶園義男 武田知己
駄場裕司 今井貞夫 丹羽清隆 岩壁義光 藤代義之 梶田明宏 置塩文
佐藤純子 浅羽みちえ 岡久仁子 藤井優子 長谷百合子 若林作絵 戸島昭
大久保文彦 東健太郎 藤枝賢治 矢野信幸 宮杉浩泰 奥健太郎 所澤潤
濱田英毅 高橋初恵

伊藤 そろそろ時間になりましたので、松崎(昭一)先生から『昭和史の天皇』のオーラルヒストリーについて、三回目のお話を伺いたと思います。この研究会の元になっています科研費が本年度で終わりですので、きょうは松崎さんのお話がうまく終われるようにお話しいただくことになっておりますので、よろしくお願いいたします。

松崎 では、前々回に引き続きましてお話しさせていただきたいと思いますが、いま伊藤先生からちょっとお許しを得まして、この前申しあげた『昭和史の天皇』のデマンド版というのが2週間ほど前に出来上がりました。私のところに送って来たのですが、正直言って『昭和史の天皇』では忘れていたことがたくさんありまして、これをパラパラッと見て、また感慨新たというか、正直いって甚だ手前味噌ですが、よくまあ出来ているな、よくここまで書けているなという思いがするわけです。

それは一つには、事実関係が非常にバランスよく、正確にキャッチできているということと、政策を遂行していく時のデシジョンの状況がこの中からよく浮かび上がって来ているということ、そういうことが今更ながらありありと分かって来まして、この本ができたことを私自身は大変喜んでいるし、それから『昭和史の天皇』が出ましてというか、発刊が終わってからざっと30年たつわけです。それが、今の時期にあらためてこういうふうなデマンド版で、「キリストの復活」ではないけれども復活したということは、これからの若い人達にとって、あの昭和20年の少なくとも1月から8月の間にいったい何が起こったのか、そして関係する人達がどのような重大なデシジョンに導いていったのか、そういうことがいろいろと思い出されまして、誠に感無量だということがあります。

オン・デマンド本というのですから、つまりは図書館が主な買い主として、図書館は当然、貸出しということが大きな使命ですから、この本のつくりというのは驚くぐらい頑丈なわけですが、

またそれとともに驚くぐらい値段が高いということも僕の想像を超えていて、8冊揃いで何と税込みで5万800円というんですから、これはとてつもない値段で……。

伊藤 それほど驚かないよな（笑）。

松崎 しかし、こういう本になったということ、この元版というのは、ここにお見せするような読売新聞社発刊のゴールド版という8冊本で、来年はご存じのように終戦60年、そういうことを踏まえて読売のほうから中央公論に要請なり何かがあって、このデマンド本をつくったのではなかろうかと思われる方がいらっしゃると思いますが、まったくそうではなくて、この前も中央公論の編集の方にお目にかかっているいろいろお話を伺ったんですが、そういうことはまったくなくて、これは中央公論独自でつくったんだと。

この8冊本というのは非常に少ない部数というか、ある緊急避難的な意味でつくったものでして、全30巻の中の昭和20年1月1日から正確に言えば8月12日までを書いたわけです。したがって、全30巻のダイジェストではなくて、昭和20年1月1日から8月までの間に起こったこと、たとえば戦艦大和の出撃だとか、沖縄決戦だとか、満蒙でソ連軍の参戦によって開拓民がいかにも悲劇的な状況になったか、それからヨーロッパでポツダム宣言がどのようにつくられて、どのように展開していったのか、そういう面を書いたものです。もしご希望というか何かがあったら、中央公論では二割引きにいたしますから、どうぞ皆さん、ご活用いただきたいということですが、ちょっとこういう本だということをご覧になっていただければ、ありがたいと思います。

きょうのお話ですが、私の事実上のキャップであった当時の社会部長の辻本芳雄というのは、昭和46年6月に編集局長が代わりまして、長谷川実雄という、あるいは巨人軍の代表になった人ですから、この名前を聞かれた方がいらっしゃるのではないかと思うんですが、長谷川実雄というのが編集局長になって、その片腕の編集総務として辻本芳雄が急遽、『昭和史の天皇』のキャップというよりもヘッドと言ったほうがいいのか、ヘッドから編集局総務に移りまして、したがって『昭和史の天皇』のキャップに私がそのまま引き上げられました。私自身は、実際の取材から離れて、すべて『昭和史の天皇』の運営というか、それについての責任のポジションにいたわけです。したがって、取材の第一線から離れたわけで、これはいささか寂しい思いをしたのですけれども、とにかく『昭和史の天皇』はそのまま続けるということでした。

お手元に行っていると思いますが、30巻の中の第14巻の後半から、いま申しましたように私が『昭和史の天皇』の一応の統括者になって、そして第15巻までは今までの筋道で進んでいったところが、ちょうど第15巻目の「第八中隊」というところで、中国政府からクレームがついてストップがかかったということは、前にもお話し申しあげました。したがって、この後をどうするんだということで、下手にやめるとまた週刊誌その他がいろいろと騒ぐからこのまま続けたいということで、苦肉の策といえますか、ここで登場して来たのは本でいうと、第16巻目の「“物動”の序幕」というところから、私が統括をした上で『昭和史の天皇』を続けるという、一つの大きな命題のレールの上を走りだしたわけです。

ところが、読者の反響というのは、やはり人間が生に動いて、言葉は悪いですが事件がドラマチックに動いた時には、読者の反応が大変大きいというのはよく分かっていたわけです。そこへ

もってきて、この「物動」の除幕」で、近衛と軍「国家総動員法」になりますと、これは話は大変ややこしくなって難しくなって、正直いって読者の反応というか、評判は必ずしも面白くなかったわけです。

そして、第 18 巻の辺りになりますと意外や意外、ヒットラー政権の下のドイツという問題が登場して来たわけですが、これはどういうことかといいますと、いわゆる昭和期陸軍——あるいは海軍でもそうですが、いわゆるドイツ派というものの勢いが強くなって、そのドイツ派の考え、報道によって日本の国策が大きく動いていった。じゃあ、どのようにナチス・ドイツとの関係があったのかということを考えてみますと、意外とその方向での著作は、この『昭和史の天皇』を行っている頃にはほとんどなかったというのに等しいわけです。そこで、ナチス・ドイツというものを踏み込んでやってみたわけです。

ところが面白いことに、やってみると、ナチス・ドイツ時代にドイツに留学していた方、あるいはドイツ問題を勉強していた方、そういう方が結構おりまして、大変これはこれで面白かったわけですが、第 16 巻の終わりの「物動」の序幕」の電力国家管理案、それから内閣調査局、企画院なんていうのは、これも専門書としてはあるんですけども、意外とポピュラーな形で一般大衆の方がとりつきやすいような本がないということに気がつきまして、ここをひとつやってみようということですが、いま申しましたように一般読者の評判というのは、満洲開拓民の悲劇だとか、沖縄決戦だとか、そういうものと比べて格段に少なかったということは事実で、こういう「物動」の問題をいちばん褒めてくださったのは、ここにいらっしゃる伊藤（隆）先生だったわけですが、それはそれとして、電力国家案とか、こういうような問題、つまり日本が戦争体制一色になっていく、そういう問題をとにかくできるだけ分かりやすい形でアプローチしたのが、この『昭和史の天皇』の一つの功績ではないかと思うんです。

当時、この取材を私から言われてやった諸君は大変苦勞したと思うんですが、この中で面白かったのは、「企画院事件」というのが私の記憶に非常によく残っているわけです。これは、裁判記録は残っていて、おおまかな姿は分かるんですけども、その内部に立ち入って、その関係者から直にヒヤリングできたというのは、これもほとんどなかったと思います。これを担当したのは、もうこの時だけ一年いたかどうか、原稔君というのがいまして、彼は現代史の素養は当然のことながらなかったわけですが、これにやらせたところが、彼も闇夜に鉄砲を撃たれたような形で大変とちめんぼうを食らってウロウロして、一人の人について五回ぐらい取材をやり直させた記憶があります。

それからこの時、どういうわけだか私が一人だけ取材をしているのは、後の鎌倉市長をやった正木千冬さんに、どういうわけだか私がヒヤリングをやっていて、そして正木千冬さんについて大変好感というか、教えられるところとかいうのか。あの方自身が、雑誌の『エコノミスト』育ちですから、ジャーナリスティックな感覚をお持ちだったのだらうと思います。しかし、ずっと後になって『昭和史の天皇』のはるか後になってから、鎌倉市長時代のことを他の者から聞くと、やっぱりあの人は社会党系の施策でもって、市の職員の給料を上げちゃったりしてあんまり評判がよくなかったという話を聞いたことがありまして（笑）、へえ、そうなのかなと思いましたけ

れども、少なくとも私には非常にシャープな印象を残してくださった方です。

それから、「ナチスとケインズ」をやりまして、ケインズというと、いわゆるケインズ学説ばかりが日本人の頭の中にあるわけですが、実はケインズが第一次世界大戦の講和会議で大変な活躍をしているということもよく分かったし、それからこれは誤解を招く恐れがあるので僕はそう簡単には言えないと思うんですが、ナチス・ドイツの国民に対する施策というのが、果たしてその当初は、やはりそれなりの国民に対しての大きな高揚を持っていたのではないかと。たとえば今でもそうですが、ドイツ人が夏休みの旅行を非常によくやるわけですが、あれをそもそも始めたのがナチス・ドイツの時代であること、それから例のアウトバーンなんかも、アウトバーンをつくるのと同時に、それを走らせる車、その車のエンジン開発、それが軍事産業につながっていたということ、そういういろいろな面白いことが分かりまして、ナチス・ドイツについて書かれている学者の方の本を読むと、私のような頭では難しく、そこですぐ「ナチス・ドイツは悪だ」というスライドがかかっちゃっているわけですが、「ちょっと待てよ」ということ。そういう意味合いが非常に多くて、今でもそれはナチス・ドイツを見る場合に、頭からこれを「悪」だとスパッと切りつけるのには、ちょっとためらいがあるわけです。

それから、ご存じのように（ヒャルマー）シャハトという大変な、日本でいうと日銀総裁でしょうか。シャハトなんかを登用して、シャハトによってドイツ経済というものを復活させて、ああいうやり方は国家社会主義の一つの方法であり、方向だったのかと思うと、やっぱりもう一度、ナチス・ドイツというものを「悪いか」という二元論ではなくて、もう一度現代史という俎上で見つめ直してみることも大切なんじゃないかなという、嫌な言葉ですが「歴史の教訓」みたいなものを受けたわけです。

当然のことながら、昭和期日本の外交、軍事ということでは、「日独防共協定」というのが大きなウエイトを持っているわけです。「日独防共協定」については、これも『太平洋戦争への道』ではきちっとした、当時としてはなかなか手に入らない史料をよく分析されて、早稲田の大畑篤四郎さんがやってくださっているのですけれども、とにかく生きていた人の話ということでは、まあこれは僕はよく出来ていると思うし、ことにその中であって活躍した駐ドイツ参事官になった柳井恒夫さんにとつぷり話が聞けたということは、大きな成果だったと思います。

ご存じのとおり、柳井さんというのは次男坊が後の外務次官、それから駐米大使をやっていた。そういうことなんです、この柳井さんから話が率直にお伺いできたのは、柳井さんの長男の柳井乃武夫さんという方が国鉄の旅客局にいて、私が国鉄のクラブの記者をやっている時にその柳井さんと親しくしていただいて、その関係で、「じゃ、親父に話してみる」ということだったわけで、ここでも人と人とのとんでもないところのつきあいというのが、実はこういうヒヤリングをする場合に、ただある日突然ドアをトントンとノックするのではなくて、それだけの人間的な関わり合いの伏線があるということは、やっぱり興味深いことではあるわけです。そして、「日独防共協定」をやりますと、当然のことながら登場してくるのが、まあおそらく、いわゆる昭和史の中でいちばん難関と言われる「日独防共協定」強化問題ということ。そして、ここに登場してくるのが大島浩ということになるわけです。

そういうことがあって、徐々に徐々にこの話が進んでいきまして、これもまた評判の悪いところでございましてね。専門の方からはわりあい好評ではあったんですけども、一般の読者からは『『ガウス案』なんてなによ、東京ガスじゃないんだよ』なんていうような悪評を言われまして(笑)。まあ、そのうちにこれとの関係で、ノモンハンへのめり込んで行った。ノモンハンも、もうこれは私は原稿を見てみんなに指示を与えた、そういうことで、これもまたノモンハンに関係した人達からは大絶賛を受けたわけですけども、多くの方からは「これは、どうなのかいな」ということだったわけです。

それから第30巻に、意外や意外「日米交渉」が登場するわけです。この「日米交渉」は、『昭和史の天皇』では、天皇そのものでは扱ってないわけです。これはどういうことかと言いますと、急遽、読売新聞の人的、あるいは紙面改正などがありまして、『『昭和史の天皇』はもうここら辺でストップしろ』というご下命があって、とにかく本にするとやっぱりきりのいいところで30巻にしたいということで、「おまえ、何か書き足せ」ということだったわけですが、その間に私は密かに「日米交渉」の最後の時が『昭和史の天皇』にピリオドを打つ時であると考えて、「日米交渉」については密かに取材をさせたり、自分でも関係の方から話を聞いたりしていたわけです。

ですから、たとえば南部仏印進駐があって石油がストップされる、ガソリンがストップされるという時に、それを見込んで三井物産を通じてアメリカから相当大量のガソリンを輸入しているんですが、それが容れ物がなくて、ウィスキーの樽を空のまま船で持って行って、そしてウィスキーの樽にガソリンを入れて日本へ持って来たというような、甚だ面白いといえば面白い、喜劇的といえば喜劇的、またそれが悲劇的でもあるわけですが、そういう話なんかも取材はしておいたわけです。じゃ、それを急遽入れましょうということで、この「日米交渉」を入れたんですが、やはり本のための本ということですから、たとえば日米交渉における甲案と乙案の問題点なんかもあんまり書いてなくて、しかしこの間、井川忠雄さんのことを書いて、これは遺族というか甥っこの人からえらいクレームがついて、悲鳴を上げたことがあります。

まあ、そういうような思い出はあるんですが、その後半の段階の中で、私自身は直接取材をしなくなった中でいちばんのハイライトというか、その一つが大島大使からきっちりと「日独防共協定」強化問題について話をお聞きすることができたわけです。この間も、明治大学の三宅正樹さんの『日独伊三国同盟の研究』というでかい本があって、いま古本屋に行くと3万円するんですよ。その三宅正樹さんは、長いこと明治大学の大学院で教えていましたけれども、今年の春定年になって、「定年になりました」という挨拶の電話がかかってきました。その時に三宅さんが言うのには、「あの『日独伊三国同盟の研究』の本をつくるのには、松崎さんと一緒に大島さんのところに行ったのが一つの大きなきっかけであった。あれで自分で自信をつけて、大島大使というのはこういう方であった、という自分なりのイメージを腹の底に入れて、そしてあの『三国同盟の研究』が出来たんだ。本当にありがとう」という、思いがけない言葉をいただきまして、大変うれしかった思い出があります。

大島さんという方にお目にかかった時の第一印象は、意外と背の低い、「これがあの有名な大

島大使か」というような感じで、僕が取材をした中に三人体の小さい方がいらっしやっただんですが、一人は前にも申しあげましたように木戸幸一内大臣、それから大島大使、それからしばしば軍事の問題で出てくる、軍事のことでとくにトラウトマン工作のそもそものきっかけ、これは石原莞爾の命令によって馬奈木敬信というドイツ班員が駐日独武官・のち駐日大使となるオットを連れて上海に行くのが、これが始まりなんです。この話を私が聞いたのは、おそらくいわゆる研究者の中では初めてだったと思います。そのことは、時系列的に他の本と比べて『昭和史の天皇』の馬奈木敬信の件と突き合わせてくだされば、どちらが早かったのか、ウサギとカメの駆けっこではないけどお分かりになると思うんですが、とにかくトラウトマン工作のきっかけで活躍した馬奈木敬信、この三人の方が、自分の想像より体が小さいのにいささか驚いたようなことですが、とにかく大島大使の話。これは『昭和史の天皇』では、「史料によれば」という形で入れたんですが、後でもって 30 巻のところで書いておきましたように、「史料によればというのは大島大使である」ということを前提においてお読みくだされば、大変ありがたいと思います。

そこで、私の話はこれぐらいにしまして、「大島大使にとにかく会って来い。おまえなら、大島さんは孫娘のように思っただけでよく話してくれるはずだから、おまえ行って来い」と言って行かせたのが、まだ御年二十何歳のうら若い、何にも知らない桑野君だったわけです。桑野君だって、「これはひどいことを言うやつだな」と思ったかも知りませんが、何回か回を重ねるにしたがって、それなりの知識というか厚みはついていくと思うんです。ですから、きょうもここに、あらためてコピーをとっていただくかな。「オーラルヒストリーの経験的ヒヤリング（なにを、どのように聞くか）」というのを、ちょっと思いついたまま、前に書きましたオーラルヒストリーについての一種のダイジェスト版とお考えくださって、とにかく若い研究者は一回、ある方のところにヒヤリングに行って、そして何がしの収穫を持って来る。しかし、それで満足することなく、自分でもっとこれを画面拡張をしたいというような時には、果たしてこの言葉は当たるかどうか分かりませんが、レポートというか、何回も何回も行って話を伺うということが大切であろうし、そのことが出来るためには相手の方からの信用を得ること。そのためには何が大切であるかということ、ちょっと書き抜いて来ました。

そういうような積み上げの中で大島大使に桑野君を行かせて、桑野君も大変ご苦労だったけれども、それに見事応えてくれて、そして「日独防共協定」強化問題、これは何度も申しますが、いわゆる現代史の中でいちばん難関で、いちばんややこしい、いちばん面白くない話です。そこを、とにかくクリアしてくれたこと、これはあらためて桑野君に、この席を借りてお礼申しあげます。そういうことで、今度は桑野君から、大島大使の思い出、そのことをお聞きした上で、今まで三回にわたってお話をさせていただいたことについて質疑がおありになれば、どんどん質問をしていただきたいと思います。じゃ、桑野君、話してください。

伊藤 大島大使の問題だけでなくいいですから、松崎さんのやり方とか、いろいろ話してください。

松崎 もう何でもかんでも、あんちきしょうと思うことも（笑）。

桑野 実は私、大島さんとはちょうどびったり六十歳違います。で、同じ酉年で。ということは、

私は来年六十歳になるんですが、つまり、来年生まれる子どもが二十何年たって私に話を聞きに来るという状況を考えてみて、初めて大島さんの心がいかばかりだったかということが分かったような気がするんですが（笑）、その当時はもうしゃかりきに肩を張っちゃいまして、何がなんでもということから、会社を出る時は松崎さんに毎回なんですけど、「おまえな、年寄りの手柄話を聞く孫娘のつもりで行くなよ」というのを毎回背中に聞きながら、当時の4～5キロあるような大きなカセットレコーダーを持って、片方に千疋屋のメロンを持って、茅ヶ崎までヒョコヒョコ、ヒョコヒョコ出掛けて行くわけなんですけど、大島さんのお宅というのは、ものすごく広いんですよ。多分、お家の別荘だったところだと思うんですが、全然手を入れてないところに昔風の二階屋の和風の小さなお家が建ってまして、そこに奥様と二人でお住まいになっていたんですが、あんまり広いものですから、時々若い男の子と女の子が公園と間違っって入って来て、テント張ってキャンプをしている時があるらしくて（笑）、怒って追い出すという話をしばしば聞いたことがあるんですけども、そんなところにお伺いしました。

初めは、松崎さんの付録のような形でついて行っていましたから、隣でちょこちょこテープを切ったり入れたりしているだけの娘が、ある日突然一人でやって来まして、「よろしくお願ひします」と言われた時に、大島さんが、「女性に歳を聞くのは失礼だけど、あなたはお幾つですか」と言われて、「二十五歳になりまして、終戦の年に生まれました」と申しあげたら、「ああ、私が六十歳、すべてを終えた時にあなたは生まれたんだ。ということは、あなたが私の話を聞くということは、僕らが鎌倉時代の話を書くのと同じことですね」と（笑）。"いえ、そこまでは離れてないんですけども"と思ったんですが、何か申しわけにちょっと言って、でもチョロチョロ、チョロチョロ、メモを出して質問をするということに一所懸命答えてくださいました。

先ほど松崎さんもおっしゃったように、非常に小柄で165cmあるかないかだと思うんですけども、立ち上がると本当に小柄ですし、写真で見るとゲルマンのばかでかい人達の間に入ると、本当に見えなくなっちゃうような感じの写真ばかり見ているんですが、不思議なことにあの方、座るとものすごく背が高く見えるんですよ。どうやって研究しているのかなといつも思ったんですが、籐椅子に何気なく腰掛けるんです。ずっといつも着物でいらしたんですが、ずっと座ると、話している時にもものすごく身長が大きく見える。最後まで不思議でしたけれども、そういう上手な座りかたを研究されて、別にかっこつけているわけでも何でもなく、体を預けて手をこうしているだけなんですけれども、座っている限りはほんとに背が高く、なんかこう立派に見えるんだな、という感じがしましたね。

何度も何度もお話をしに行っているうちに、私は個人的に、この「防共協定」の大半は電報のやりとりですから、字句がどうしたこうしたということのやりとりで、聞いているうちに時々フーンと違うことを考えちゃって、だいたい興味があつて聞きたかったのは、ヒットラーとどんな話をしたのか、実際にあのヒットラーってどういう顔色をしていて、どんな人で、どういう声で、何に興味があつて、というようなことのほうにどんどん、どんどん個人的な興味が逸れて行きます。で、ゲーリングだとか、ゲッベルスだとか、歴史の本で有名な人間よりも、大島さんがおつきあいになっているのはリップントロップですとか、あまり後々有名でない人達なもので

すから、どうしても有名な人とどういう話をして、どういう感じで、どういうお酒の飲み方をするのか、というようなことに話の興味が移っていつっちゃうものですから、なんとなく話の合間にそういうことを聞いてみたりするんですけど、大島さんの本質的なところというのは、あの方は陸士、陸大卒、しかもお父さまが偉かった人ですから、本当の日本でいうエリート陸軍の軍人で、ナチスの人達にある時一遍だけ、「ナチスというのは、その辺の八百屋のあんちゃんとか、トラックの運ちゃんが偉くなっていく、そういうものですからね」ということを、さりげなくおっしゃったことがあって、あ、やっぱり大島さんって、本質的に国防軍ですか、そっちのほうを信頼していたのかな、という気はいたしました。でも大島さん自身も、やっぱり日本も利用されていた感じがあるのかなと思うんですけども、あれだけドイツで有名でありながらヒトラーに会う回数というのは多くなくて、いつもリッペントロップが間に立って。ですから、本当にヒトラーが考えていたことを、大島さんが聞いたのかどうかというのは、ちょっと難しい部分があるかと思うんですね。

大島さんがいちばん感じていらしたのは、私達がよくベルリン・オリンピックで見るような、ヒトラーのすごい軍人のパレードみたいなのがありますね。ああいうのを嫌というほど大島さんは見せつけられていたと思うんですけども、ある時に、「あれを見て、どうしたってドイツが敗けるとは思えなかったですよ」ということを、はっきりおっしゃったことがあったんです。あ、そうだったんだろうなと思って、大島さんはイギリスへはしょっちゅう吉田（茂）さんを説得に行っていましたから、イギリスのことはご存じだったかと思うんですが、ソ連も一回ぐらい見に行っただけだったと思います。まして、アメリカがどうであったかということは全然ご存じなくて、そして見ているのがドイツだけですから、やっぱり幻惑されるのは当然だな、という気はします。

なにより、最後のほうに来た松岡洋右さんがやっぱり幻惑されて、「これでドイツは勝てる」と思って、ドイツから帰って来たという記述がありますよね。あれも致し方のないことだと思ったのは、松岡さんはアメリカに留学してアメリカをよくご存じなのに、それがドイツへ来て幻惑されちゃったということは、大島さんが「どうあったって、ドイツが敗けるわけがない」と心底信じて、それでこの「防共協定」の日本がチンタラチンタラやっているのに痺れをきらせて、ガンガン、ガンガン電報を打つという気持ちは、お話を聞いているうちに私にはよく理解できたんです。

時差があるものですから、電報を書くのが夜から夜中になって、大島さんはお酒が好きなものですから、お酒を飲んで電報を書いていたらしいんですね、ご自身で（笑）。ガンガン飲んで、ガンガンやっちゃって、翌朝“ちょっとやり過ぎて、しまった”と思うことが何度かあってという話をしていらっしやいましたので、ああ、やっぱりそういう筆の勢いみたいな部分もあるのかと思って（笑）、そういうものが証拠として残っちゃったということは、大島さんにとってはちょっと気の毒ではあったんじゃないかなと思いました。

吉田さんのところに行って、吉田さんの足を引っ張ると思込んでいらしたから、「ドイツがあれだけすごい軍隊を揃えて、あれだけのことをやっていて敗けるわけがない。軟弱なイギリス

なんか、支援していて何の意味がある」ということをどんどん言いに行き、喧嘩して帰っていらしたんですが、結局は吉田さんのほうが正しくて勝って、大島さんは昭和 20 年に船で東京に引き揚げていらした時に、「私は国を誤ったということで、いちばん最初に吉田君のところに行きました。で、『あの時のことは申しわけなかった』と言って、私は謝りました」と。吉田さんは、その意味では度量の広い人だったらしくて、「いや、各々の立場立場があって、致し方のないことだったと思う」ということで、大島さんは帰っていらして当然なんですけれども、仕事の世話をしようということを吉田さんのほうからおっしゃったらしいんですね。「いや、私は国を誤った人間だから、今後いかなることがあっても公務に就くつもりは一切ないと言って、断りました」と。何か微笑ましいというか、ああ、やっぱり大物って違うんだなという、そういうお話なんかがありました。

だから、実際に私に「出掛けて聞いて来い」と松崎さんがおっしゃることは、電報が、こういった時にどう考えて、どういうふうに打ち返したのかという、その細かい部分を私が聞いてこななければいけなかったんですが、大島さんももう八十歳過ぎていらして、そういうことをあんまり覚えていないということと、そういう話をしているうちに、その当時の政府のチンタラチンタラ、「何とかソ連を引き込めないか」とか、「もうちょっとまいことドイツをこっちのほうに向けて何とかできないか」というような、要するに煮え切らない態度ばかりしてくる日本にイライラしているのが、話しているうちに思い出してくるんですね、きっと（笑）。それで、だんだん興奮して起き上がって、「こう言って、これをやらなきゃだめだって、私は言ってやったですよ」と言いながら、だんだん同じパターンで同じ話になっていっちゃうものですから（笑）、そのところでもう一度元へ戻すのがなかなか大変で、元へ戻して核心に触れるかなと思うと、「止めてください」となって、アッと思うと、テープレコーダーのボタンを止めてオフレコの話になっちゃうんですね。

だから、本当はオフレコの話のほうが多分、本筋に触れていたかとは思いますが、それはルールですから「やめてくれ」と言った部分はやめて正解かなと思ったんですが、面倒見のいい人ですから、あの時の大使館には西郷従吾さんとか、山県有光さん、いずれも血筋のいい人ばかりが集まっていました。のちの駐米大使の牛場（信彦）さんもいらしたんですが、牛場さんはその頃、「私は平和主義」的な立場でいらしたんですけれども、大島さんに言わせると、「なんか大使館でチョロチョロして、酒飲んじゃ威勢のいいことを言っていた子どもでしたよ」という一言で片付けられていましたけど（笑）、そういう話を、牛場さんも形無しだなと聞いていました。もう飛ぶ鳥を落とす勢いの駐米大使でしたからね。

でも、そういう人達よりも、最後の最後まで西郷さんとか、山県さんとか、心酔して大島さんのところへ出入りしていらした方のお話というのは、どうしてもドイツ寄りになるということで、大島さん自身もいちばん嫌だったと思うんですけれども、ユダヤ人問題にちょろっと触れた時に、大島さん自身も大使だった時に、何人かアメリカへ逃がしたことがある、という話をされていたんですが、立場上あんまり反ナチス的な言動とか、反ナチス的な行動というのはしなかったし、ああいうところにいて外国の人間が知る立場には絶対ない。何が起こっていたかということとは、

公式なこと以外に彼らだって言わないので、日本人はその当時何をしていたのかといっても、あれは戦後に掘り起こされたことであって、戦前そういったことが行われていたということを知っている人間なんていうのは、ほとんどいなかったはずだと。ただ、町中でいろいろあって、ユダヤ人が追い詰められているということを見ていないわけではなくて、大島さんは助けを求められた人を助けていたという程度。

大島さん自身は、ヒトラーが絶対ヨーロッパを制圧すると信じていらしたから、ヒトラー自身のやっていることにそれほどの批判はなかったと思うんですね。そういう意味では、大島さんの武官から大使というのはやはりあの時、先ほど松崎さんがおっしゃったように、私なんかもナチスを思い切り悪者にする中でずっと育てて来ましたが、大島さん達に言わせると、「民衆の支持がなくて、個人一人あそこまで立ち上がれるわけがない。オーストリーの併合の時なんか、オーストリーの人達がどれほどナチスを歓迎したか。それは、あの時点で見ている人間にしかわからなくて、後になるとオーストリー併合も、チェコ併合も、みんな嫌々ながら全部亡命して、全部が反ナチスでまとまって、全部がパルチザンでいろいろやってみたいなことを言うけれども、本当はそうじゃないし、本当にそうであったら、あそこまでナチスが成長するわけがない」ということを、しょっちゅうおっしゃっていました。

だから、とことん民衆の支持を得ていた時期があって、そしてそこまで大きくなって、松崎さんがおっしゃったようなアウトバーンをつくって、車をつくって、飛行機をつくって、最初にイギリスをやって、ポーランドまで行っている時、それからソ連にワッと行った時なんかは、もう大島さんにしてみると、「ざまあみろ」という感じだったと思うんですね。「ドイツと結んでいなかったら、今ごろ日本なんかめっちゃくちゃだぞ」というような感じでスタートしていたと思うことが、全部覆っちゃったために、「そういうことを言う資格がない」というお気持ちになったので、自分が「どうだ」と思ったときの気持ちは極力押さえていましたし、公式なところでは言うまいとしていらしたのはよく分かるんですけど、個人的にヒトラーと会ったのは、多分一年間に一回か二回ぐらいと。私達から見ると、しょっちゅう会って、やあやあとやっていたような印象があったんです、あれだけ親独ですから。だけど、やっぱりそういうことではなくて、日本という国は（ドイツにとって）利用しようと思った一つの駒にすぎなかったのかなと、だんだん勉強していく時期にそういうふうな感じはしました。

それで、そこしか見ていなくて、そう信じてしまうというのがどうしようもないと思ったのは、話は飛びますが、その後ノモンハンも取材に行ったんですけども、そこでは大島さんの立場とはまったく逆に、実際に戦車に乗かって戦った人達の話全部聞いたんですね。戦車部隊の話聞いて、戦車の人達の話聞くと、ドイツが蹴散らしていたようなそのソ連軍が、ノモンハンで装甲車、BT戦車なんかでワアワアやるわけですね。そうすると、「あいつらは、戦車も装甲車もみんな置いて逃げちゃう。それを俺達が見に行くと、その装甲車の鉄の分厚いこと、それからつくり方の乱暴なこと。ほとんど鉄は打ちっ放し、切りっ放し、それでただ分厚くして、榴弾なんか無論のこと、尖鋭弾だってなんだって全然ぶち抜けないようなものをつくっていて、ガンガン送り込んで来て、なおかつまずいとなったら全部置いて逃げちゃう」という。

日本の場合には、戦車は芸術品ですから、置いて逃げるなんてとんでもない。「おまえ達は死んでも、戦車だけは持って帰れ」みたいな状態で、当時、昭和13年、14年に自動車部隊で運転免許を持っている人というのは、必ず二等兵が二人守ったんですね。で、運転する兵隊さんにも聞いたんですけど、もう技術者。「おまえ達は死んでもいいけど、運転手だけは生かせ」というような状態で大事にされている。そういうのが、芸術品の九八式とか何とか、ちょっと時代遅れの、あらゆるところに人間の手がきちっと加わった戦車でもって行って、ガンガンやられると一発で全部だめになってしまう。それでも必死に修理して行くのに、あの人達はそれを置いて行っちゃうし、「とにかくもう物量で、最初から話にならないんです」というのは、最前線で戦った玉田戦車部隊の人達の話でした。

それは多分、後ろのほうにいる関東軍の人達は知らないわけですよ。で、日本軍の精鋭部隊の装備だけ見ていると、「これで日本が中国軍に敗けるわけではない。あんなソ連なんかの、ヨーロッパの田舎っぺに敗けるわけがない」と思い込んで、どんどん行っちゃう。あれだけ通信手段がない時代ですから、そこだけしか見ていない人達はもう完全にそれを信じて致し方なかったと思うんですが、実際にこうやって送り込まれて見ている人達は、いかにすごいかということ。多分私は知りませんが、太平洋戦争でもそれを見た人間は感じたと思うんですね。

そういう意味で、大島さんが東京裁判で「インドのパール判事の一票でもって、私は首がつながった」というように、ドイツに傾倒したことというのは一生の罪として背負っていらっしゃるんですが、やっぱりあそこにおいて、あの立場で、リップントロップの話を聞いて、特等席でもってあのナチスの行軍、パレードを見て、あのすさまじい戦車と、自動車と、飛行機部隊を見たらやっぱり、「どうしてこれでドイツが敗けるだろう。そのドイツと手を結ばない日本は、何を考えているんだ」という苛立ちは、話を聞いているうちに手にとるように私に分かってしまって、だんだん、だんだんアンチ・ドイツ、アンチ大島としての質問がなくなっていっちゃって(笑)。大島さんの話をだんだん、「はい、はい」と素直に聞くようになってこっちに持って来ると、松崎さんに「なんだ、おまえ、このところが何故こうなるかというのをもう一遍聞いて来い」「はい」と、また茅ヶ崎までとことこ出掛けて行って、「実は……」と言うと、またウワツと大島さんは自分の感情が、「そうじゃないんだ、日本でこんなことをやっているから、いつまでたたってドイツの真意は伝わらない。俺の電報がこれだけ行って、これだけやっているのに、まだ分からない」ということで。

松崎 その電報を読むんだから、「防共協定」強化問題は難しいですよ(笑)。

桑野 そうやっているうちにだんだん、「ああ、いけない」と思いつつ、これがオーラルヒストリーのいけない一面なのかなと思うのですが、信用を得て話を聞いているうちに、心情的にどんどんその人にのめり込むということですね。

ノモンハンでも戦車部隊の人達の話聞いて、最初は若い娘が行くものですから、「桑野さんは、戦車の中で人が戦死するって、どういう状態なのか分かりますか」と、最初にそうやって脅かすんですね(笑)。「エ?」と言うと、「あの中はね、弾が外へ出て行かないんです。だから三人乗り、二人乗り、その尖鋭弾なり榴弾なりが一遍中に入ってくると、あっちこっちに弾が跳ね

返って、中にいる人間はミンチになるんです」「エッ？」と、そういう中でハンバーグみたいになっちゃうという、それを想像させるように。後から考えると、だって弾は力がなくなっていくわけですから、人間の2～3回は撃ち抜くとしても、ミンチやハンバーグになるわけではないのになと思うんですが（笑）、まずそういうふうに着かして、「エ？」と言ってから、「それでも、おまえは聞く気があるか」と試されているような気がしたんですけども、そういう戦場のすさまじいあれですね。

片方のほうに行くと、「戦場で死体を焼くというのは、本当に魚を焼くみたいに焼くんです」とか（笑）、私がメモを広げて歴史的な体験を聞く前に、「桑野さんは、そういうのって知らないですよ」という話から、「死体を焼くと焦げるように、クルッと裏返すんです」とか、だんだん、だんだん黙っちゃうような話で、いろんな人がまずそういう話から最初に入りました。で、脅されて、「それでもおまえは、通って来て聞く気があるのか」と試されて、でもそれをじっと耐えて。最後のほうは凶々しくなって、「それって、最後まで焼いちゃうわけですか」とか（笑）、「そのまま置いて行っちゃうわけですか」とか、だんだん凶々しくはなりましたが、いちばん最初はなんとなく夢に見るような、本当に目を丸くして、戦車の中で戦死するとハンバーグみたいになっちゃうんだという感じで、先ほど言った有山（恭弘）さん、片矢さんと松崎さんをお願いして、戦車部隊、当時の自衛隊の特科連隊に戦車に乗せてくれるようにと頼みまして、実弾演習の時、当時のM60（アメリカの戦車です）に乗せてもらったんです。

松崎 そんなことも許したんだ。俺、それは知らなかったな。

桑野 で、戦車に乗って走るんですけど、ここで弾が入って、本当にキンコン、キンコン言いながら肉を刻んでいくという、それをその当時の自衛隊の人に聞いてみたら、「いや、力が弱まりますし。でも、それは完全に撃ち抜きますよ」と、何気なく言うんですね、やっぱり。戸を閉めて走る戦車の怖さですか。こんな窓から覗いて、向こうからアリのように押し寄せてくるソ連の装甲車と、BTの戦車の前に立ち向かった人達の気持ちというんですかね。エーッというほど思い知りましたが、でもそういうふうなことを体験してから話を聞いたら、玉田美郎さんという戦車隊長さんも、一応お話がどンドン、どンドン核心に触れてくるようにはなりましたが、その当時、「戦車の話を、ノモンハンを取材していた司馬遼太郎さんには話さなかったけれども、読売新聞がそういう形できちっとやってくれるのであれば、部隊を挙げてお話しします」といって、靖国神社の戦友会に呼ばれて、そこでいろんな人にいろんな話を聞くんですが、これ（テープレコーダー）を持って走って間に合わないんですね。いろんな人達が、「いや、俺達の部隊のところではどう」とか。ああいう大平原ですからめちゃくちゃにやっているわけなんですけれども、「え、じゃ、その中隊はこちらにいらしたんですか、こっちにいらしたんですか」「覚えていねえけど、とにかく行くしかなかったんだ」とかいう話になっちゃって。

これ、きちっと整理しないで持って帰ってテープを起こすと、また松崎さんに叱られますから、それを持って帰って、また全部電話で聞いて、戦車部隊の話として起こさなければならぬ。だけど、とりあえずはとにかく実戦で戦った人達が、「俺達が戦ったということで、それは歴史的に見てどうであったという判断は別として、国のために懸命に戦ったということ」を旧日本軍の罪

悪という形ではとらえてほしくない。それだけは、とにかく書いてくれ」というのは、実戦部隊の人達の話を書く時に必ず最後にあることで、「みんな国がよくなる、国のためだと思って、上のほうが腐敗しているとかしてないということとは関係なく、当時の人間はみんなそう思って出掛けました。南方へ送られていく人間でも、みんな嫌々ながら、映画で描かれているようなことは絶対になかった。二十歳になって戦争に行くということは、親達は悲しんだかもしれないけれども、俺達は国のために行くということで、本当に、本当に兵隊として行くことに何の疑問も持っていなかったし、その疑問を持ってなかったことが悪いと言われたら、それは立つ瀬がない。どういう結果であったにせよ、とにかく懸命に国のためになると思って戦って来て、しかも段違いの兵力の差の中で必死に戦って来たということを、とにかくわかってほしい」という話を聞いてくると、じゃ、やっぱり大島さんのような立場の人達が、もうちょっと国を見据えて何とかしなきゃいけなかったんだろうなと思ひ返して尋ねて行くんですが、大島さんは大島さんで、そういうことになると必死に、「やっぱりさもあらん」ということで、またそのまま、その気になっちゃうんですね（笑）。

今度、東條英機さんの秘書官だった方に話を聞きに……。

松崎 赤松（貞雄）か？

桑野 赤松さんですね。秘書官の人に話を聞きに行った時にも、赤松さんは「あれだけの東條が悪人になったけれども、いいですか、桑野さん、東條の家が上野毛だかどこかにあった時に、アメリカ軍はもう日本のどこに誰が住んでいるかまで分かった時代に、東條の家を狙えとって、ワッとB29は来たんですぞ。でも、どう間違っちゃったのか東條の家は小さいものですから、その近所の大金持ちの家がめちゃくちゃになっちゃったんです。いいですか、いまの政治家と違って東條はそういう家に住んで、一切金を私して儲けたり、あるいは映画や小説に描かれるように自分達だけが私腹を肥やしてという、ああいうことだけはなかった。その一つを見ても、あのアメリカ軍が、日本の東條がこんなところに住んでいることはあり得ないといって、違う家を爆撃しちゃうような、そういうことですよ、桑野さん」と言って、最後はもう涙をこぼしていらしたのを見て、「東條さんも悪くはないのか。いったい誰が悪かったのか」という（笑）、もうそういう話は、何度か聞きに行っても、東條さんの判断。で、木戸さんのお話を聞きに行くと、「毒には毒をもって制す。今は東條しかやらせる男はいない」とって判断を下したと、木戸さんは松崎さんのお話の中で言っている。「毒をもって毒を制す」とまで、日本の中でもそこまで言われた東條さんだけど、秘書官として徹底して仕えた人には、やっぱり「東條は国のために最後まで頑張って、あとき陸軍でああするしかなかったんです」という、その話を聞いていると、本当に「そうなんだろうな」ということになってしまうんですね。

そういうことをまたその通り聞いて、私もその通り起こして、その通り松崎さんに出しちゃうと、「なんだ、おまえ、これ。言ってる通りのことじゃなくて、このことについてこうやって聞いてこなきゃ、だめじゃないか」と言って、また原稔さんと同じ、何度も何度も出掛けて行って、「実は……」と。なんですけど、やっぱり反論はあったとしても、本当に日本のためになると信じていた人達ばかりのようなので、私はあそこで8年ですか、大島さんから始まって本当の二

等兵の人に至るまで何人、何十人ですか、結構数えきれないほどの人のお話を聞きましたけど、誰の話聞いても、本当に悪い人がいない。それは、自分の話を飾って言うということではなくて、本当に悪い人はいないんですね。歴史ってそういうものかなと、いまは思います。

だから、いま小泉さんにしても誰にしても、みんな悪者になっているんですけども、あの傍にいてじっくり話を聞くと、「ああ、やっぱりこの人、国のために考えて言ったんじゃないかな」という気持ちは持つだろうという、そういう歴史に対する余裕というんですか。だから、ひとえにいま日本は、「あらゆる国に対して謝罪せよ」と、日本帝国、陸軍の悪というのをみんながあげつらって、それが固定していますけれど、全然違うなど。

一度、陸軍武官の奥様だったと思うんですけども、「桑野さん、新聞で職業軍人という言葉は絶対に書かないでください。軍人は職業ではありません。命を賭ける者に職業という名前はつけてくださいますな。私は、自分の主人にしても他の方にしても、職業軍人と呼ばれることに、本当に涙が出るほど腹が立ちます」ということを、お茶を運んでくる時に訥々としておっしゃるんですね。なんかこう、『昭和史の天皇』を取材していて、そういうことのほうが激しく印象に残りました。やっぱりみんな本当に戦前の人達は、少なくともそういう気持ちでやっていたという、特攻隊の人の気持ちだけを聞いて、「大島さんは悪い。東條に至っては最悪だ」と、それだけで括っちゃうというのは、ものすごく残念ですね、いまでも。私達も、こういう本を残したまま去ってしまうわけですけど、この人達の言いたかったことが、ここの中で分かってもらえるのかな、分かってほしいなという気はします。実際に、『昭和史の天皇』で取材をさせていただいて、こういう仕事に携わったことの最大の幸せというのは、そこにあったと思うんですね。やっぱり大島さんにしても、東條さんにしても、一兵卒の人にしても、本当にすごい。日本を思う気持ちというのは、今のわれわれと全然違う。時代といえば時代なんですけど。

で、ちょっと申しわけないなと思うんですが、オーラルヒストリーの限界というのもそこにあるのかなと。取材する人間が、その人にどンドン、どンドンのめり込んじゃう。聞く人、聞く人みんなにのめり込んじゃう。必死で話してくれればくれるほど、のめり込んじゃう。そうすると、「本当に中立でいたのかな」ということはあります。でも、それは読む方にやっぱりお任せするしかないかと。聞く人間はのめり込んじゃって、松崎さんから「手柄話を聞いて来るんじゃないぞ」と、毎回言われて送り出されて、こっちからは「なんとかそういう思いを、新聞で伝えてください」と言われて帰って、とつてもそんな技量はなくて、必死で起こす。で、出す。「なんだ、肝心なところが抜けてるじゃないか。何聞いて来てんだ、おまえ、2時間も」と言われて(笑)、また電話して、「すみません、またお願いいたします」と。

一言を聞きに行くんですけども、やっぱりそこからまた話が広がっちゃって、ブワーッといく。だけど、そのブワーッといく部分というのは彼らの思いではあっても、松崎さんが必要とする、いわゆる歴史の中核で人が今後研究するために必要な部分じゃないというところのギャップというのに、ずいぶん泣きました。これは私だけでなく、携わった人間16人のそれぞれの思いだったと思うんですが、多分それをいちばん感じていらっしゃるのは、ご自分で書いていて、なおかつ取材もされた松崎さんだと思うんですけどね。なんか、いけない、いけないと思いながら

のめり込んじゃうことと、やっぱりミーハー的なもので、「ヒトラーと握手したとき、あの人の手は非常にやわらかいんですよ」という話に感動しちゃったり（笑）。「ああ、この人、ヒトラーの手を握ったことがあるんだなあ」とか、「実際にゲッベルスと酒を飲んだことがあるんだな、この人は」と。

で、「ドイツ人というのは酒を飲んでも絶対乱れないけれど、心を許して乱れたら、完璧に獣になります（笑）。その違いは桑野さん、なんだか分かりますかね」と。これは確か小島（秀雄）海軍武官だったと思うんです。「心を許して飲んだあいつらの姿というのは、本当にひどいものです。何でだか分かりますか、その差は。あいつらね、肉食動物だから（笑）」と。日独文化協会の会長さんですからね、それが（笑）。「私らはどこまで行っただって、米食ってる草食動物ですからね。ああいう違い、これがね、ヨーロッパ人の違い。肉食動物と草食動物の違いでね、とことん一緒にはなれんです」と（笑）。

松崎 それを、小島海軍武官が。

桑野 「そのところ、大島さんはいつちゃったんですな」と（笑）。なんかそういう話がすごく面白い。「肉食動物、なるほど」という感じで、当時ドイツに行ったこともなければ、ドイツ人も知らないし、ヨーロッパ人の酒の強さだけは知ってますよね。いくらなんだって、酒のつまみもなくガッパガッパ、ストレートでやるのを見ていて、酔っぱらってもいないというのを聞いていると、「ああ、その垣根が崩れると、そうなるんだ」という話にもびっくりしましたし、そこまでつきあっちゃって結論が、「肉食動物と草食動物の違い」と簡単に片付けちゃうところがまた軍人だなと思っちゃったんですが、そういう話が非常に印象に残っています。ごめんなさい、変な話ばかりですけども。

伊藤 非常に面白いお話です。

桑野 そういうことで、楽しみました。

松崎 まあ、桑野君の話はいまお聞きのように、オーラルヒストリーのある意味での限界、問題点というのを意識して話しているのではなくて、そういうものが浮き上がってきたように思うんです。やっぱり桑野君のように、そこまで話ができるような間柄にならないと、相手は本当のところは打ち明けて話さないというところがあって、そこら辺の兼ね合い、これもオーラルヒストリーの、言葉は悪いですが一種の危うさでもあると思うんです。

あるAの人から話を聞いて、それがすべて客観的な歴史事実にはなっていないと思うんです。そこら辺は、桑野君がいま大変面白い話の中で、はしなくも話してくれていると思うんです。ただ最後にひとつ言うと、大島さんの奥さんは別嬪でした（笑）。ね。

桑野 綺麗でした、豊子夫人は。ただ、豊子さんは初めのうちは全然、ばかにしちゃって顔も見せてくださらなかったんですけども、最後は横に座っているんなお話をしてくださったんですよ。それで、大島さんが亡くなった時に、私は奥様から直接電話をいただきまして、「桑野さん、来てちょうだい」というので、亡くなった時でした。「すぐ行け」と松崎さんに言われて行ったんですが、「桑野さん、ちょっと来てね」と言って。

それまでは、大島さんのところは、大島さんの書齋でしかお話をしなくて、それ以上、入れても

らえなかったんですが、その時に初めて居室のほうに案内されました。それで、大島さんが亡くなって病院から戻っていたところ、布団に寝かされてまだ祭壇も何もできていないところと呼ばれました。「桑野さん、大島の顔を見てやってちょうだい」と言われて、まだお線香立ても何もなくて。言葉もなかったんですけど。その枕元に、西郷従吾さんと山県有光さんがいらしたんですね。

伊藤 へえ、すごいな。

桑野 なんかこう、お二人が悄然と座っている中に奥様がいらして、本当に眠るように大島さんが亡くなっていて、その時に大島さんが亡くなって悲しいという思いよりも、「あ、奥様もやっぱり私のことを認めてくれた」という、お葬式で人が亡くなっているのに嬉しかったという感じですか。普通のお付き合いでは、亡くなってすぐお部屋に入れて「顔を見てちょうだい」というて奥様が白い布をはずすということはなかったろうと思いますし、もう正式のお葬式の時には別に話しかけてくださるとか、「こっちへ来てください」ということはなく、別の人になってらしたんですけれども、行った時に「顔を見てください」と言われて、ただ手を合わせるだけでしたけれども、その時にやっぱり大島さんは、生涯忘れない人になりましたね。

だから、いくらA級戦犯で「国を誤った」と自らあの人が言って、一切お仕事をしていたらしゃらなかつたとしても、これから先、大島さんのことを悪く言う人がいたら、多分むきになって反論している私がいると思います。

松崎 いや、最後に大変いい話が出てきまして、やっぱりわれわれ、少なくとも僕自身は、このヒヤリングをやるスタンスというのは、そこまで行かなければ本当のヒヤリングというのは出てこないな、という感じは常々持っていましたね。

桑野君の大変いい話で、皆さんそれぞれのお考えと、オーラルヒストリーについてのそれぞれのお考えがおありだろうと思うんですが、ここら辺でちょっと10分ぐらいお休みいただいて、それから質問をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

伊藤 はい、そうしましょう。トイレ休憩にします。いま10分とおっしゃいましたが、人も多いことだし、質問を5時に始めます。

(休憩)

伊藤 そろそろ時間ですので再開したいと思います。今、松崎さんからペーパーが配られたのと、それから今の桑野さんのお話とオーバーラップするような形で、オーラルヒストリーの方法の話が出たのでありますが、オーラルヒストリーという言葉はちょっと落ちつきが悪いので、私もインタビューという言葉で長年やってまいりましたが、やはりそこで相手との関係、三番目にあります「誠実、謙虚、事実探究へのアンビシャスな情熱」ということが非常に大事だということは、まったくそうだと。そして、桑野さんのおっしゃったように、相手に引き込まれるという体験もずいぶんいたしました。しかし、やはり押したり引いたりとか、それをやりながら、なんとか足跡を残してきたつもりでおります。やはり長年の経験的な積み重ね以外に、これをマニュアル化するということはちょっと無理じゃなからうかという感じがするわけです。それで、さっき松崎

さんがおっしゃったように、とにかくまあやってみるということが大事だと思います。私も、いちばん最初やった時にうまくいかず、もう二度とこんなことはやるまいと思いながら、ついやった。今まで何人にやったのか、もう忘れちゃいました（笑）。

やはり、記録をきちんと残しておくことが非常に大事だということでもあります。ですから、『昭和史の天皇』としてまとめたものと同時に、その元になったインタビューというものが非常に大事だということで、私どもが松崎さんからいただきましたし、他の方からもいただきましたし、また読売新聞社に残っていたものも私のほうに寄託していただきました。いま、その一部を起こしております。これは二次的なソースですから、私どもも文章記録と同じように史料批判が必要なことは言うまでもないことでもありますけれども、やはり活字だけでやるのと、人間が見てある程度知ってやるのとではだいぶ違うんだという感じを持っております。

ですから、もはや生きておられない人々の時代を研究する場合はできる作業ではありませんが、実際に古い時期にもたくさんインタビューはやっているのです。それは、ある組織が歴史をつくるときには、必ずといっていいぐらいインタビューをやっているわけですね。ですから維新史のときもやっていますし、『明治天皇紀』のときもやっているし、そして衆議院が憲政史をつくらうと思ったときに、憲政史編纂会というのをつくって、ここでやっぱりインタビューをやっています。そういうものは、ある目的が終わっちゃうとないがしろにされるということになるのは、これは読売新聞社の場合も同じであります。それを私達はいま集めて後世に残していこうということを考えて、せっせと収集をしているわけでもあります。

その方法については、また皆さんからいろいろご意見や何かあると思いますが、私はちょっと実務的なことで、先ほど取材に当たった記者は16人の方とおっしゃいましたが、そういう方々でご生存の方々でご連絡のつく方は、かなりおられましようか。

松崎 そうですねえ、とにかく、おっくり返し引っ繰り返しメンバーを変えていましたから。

伊藤 さっきおっしゃった、原さんという方は？

松崎 原は全然、終わったら「はい、さよなら」で行っちゃったほうですから、資料は何にも持ってないと思います。あるとすれば、星野（甲子久）が持っていると思います。これの電話番号はわかります。

伊藤 じゃ、いずれ教えてください。どこからか、だんだんに聞こうと思いますので。

松崎 あと他に……。

伊藤 谷崎（竜平）さんなんかは、どうですか。

松崎 谷崎も持ってないはず。桑野君、そう思うだろう？ あと誰か、君はふっと気がつくかな。

桑野 いや、持っているという人はいないですよ、何かを。

伊藤 ある程度のめり込むと、やっぱり自分で持っていたいと思うんじゃないでしょうか。

松崎 それは、いま申しました星野が宮内庁をずっとやっついて、読売を定年になってから日本テレビで皇室関係の囑託ということで彼はいましたから。『昭和史の天皇』では、彼は終戦時の軍人さんのことを取材しているはず。だから、そのテープがあるいはあるかもわかり

ません。その可能性は四分六分だといったら、僕は六分のほうであると思います。

伊藤 これは戦後班のほうですけど、「再軍備への軌跡」は誰か持っている可能性がありますか。

松崎 それはね、誰も持ってないと思います。ということは、すべて読売に置いて。戦後班は急に撤収をしたわけですから、そこに置いたままで、その後そのテープがどういうふうになったのか。だから、「再軍備への軌跡」もそうですし、「日章丸事件」もそうですし。ただ、「教育問題」は乳井がかなり。

伊藤 乳井さんが、少し持っておられました。ただ、テープはなかったですね。

松崎 それも一括して置いて来たわけですが、それがどうなっているのかは定かではありません。これも残念だと思うんです。

伊藤 なお追求してみます。ちなみに、渡辺恒雄さんに二週間ぐらい前にお目にかかりまして『昭和史の天皇』のことを言いましたら、「あれをやめさせたのは、俺だ」と（笑）。

松崎 そういうふうに彼が言うなら、その通りですよ（笑）。

伊藤 「なんで？」と言ったら、「いや、毎回毎回あれだけスペースをとられれば、俺ら記者が書くスペースがそれだけ減るじゃない」と、非常に単純明快なお話でした。だから、「もう一遍ああいうのをやらないですか」ということを言いましたら、ウーンとか言っていましたが（笑）。
「だって、もうあれからだいぶたちますよ。戦後六十年以上たっているんですよ。その間のことをやらなきゃいけないんじゃないですか」という話をいたしました。

松崎 前にも申しあげたと思うんですが、『日章丸事件』という本が社の図書室にあったんだけど、それがなくなっちゃっていたのを最近、先輩がそれを寄贈してくれたと。ところが、何か石油問題でメジャーとの関係が出てくると、「あの本がないか」と言う者が多いんだと。だから、先輩でそういうような本をお持ちだったら、いま調査部じゃなくて何だ、昔の資料部というのは。

桑野 情報調査部。

松崎 すごい名前だ。そこへ寄贈してくれというのが、社報に載ってしましてね（笑）。「なにを今ごろ、そういうことを言うの？」という感じがいたしました。そのように、読売の図書でも古いものはどんどん捨てていかないと、物理的なスペースがなくなってしまうからそれはそうだろうと思うんですが、そこでしかるべき取捨選択の目を持った者が、図書でもテープでもきちんと保存をするしかるべき手段を講じてくれることが、このIT時代という情報時代の中では、新聞社の一つのあるべき姿であろうと思います。

伊藤 これね、今の流行りの言葉でいえばコンテンツですから。ですから、それを大事にしないというのは、読売新聞社としては非常なマイナスなんですよね。

松崎 それ、よく渡辺恒雄に言ってください（笑）。だから、明治時代の新聞をCD-ROMに起こすのも大切なことだと思うんですが、やっぱり新聞社でなきゃできない仕事——『昭和史の天皇』がその一例だと思うんですが、こういうものをどこかでやってくれることの意味合いをもう一度考え直していただけるとありがたいと、僕は思うんですけどね。

伊藤 そうですね。渡辺恒雄さんに会いに行きましょう（笑）。

松崎 このように、本が出てから 30 年たって復活する——蘇生するというのかな——ということも十分あり得る。

伊藤 十分というか、『昭和史の天皇』のゴールド版だけでなく全体を、あれはまだ生きている本ですからね。ただ、たくさん売れましたので、古本屋で安く手に入ると。

松崎 ところが、このあいだ神田を見たけれども、前はよく店の前へザラッと「30 巻揃い、一万幾ら」なんて出ていたのが、いまは全然見なかったですよ。

伊藤 古本屋の検索でやりますとバツと出てきて、いまそんなに高くないですね。

松崎 高くないですよ。前のやつは、装丁があんまりよくないんですよ。

伊藤 そうです。残っているのはバラバラ、危ないのがありますよ。

松崎 だから、『昭和史の天皇』の第一巻が出た時に、いま言った星野を通じて宮内庁へ、陛下に献上したわけです。そうしたら当然、侍従職から行くわけです。昭和天皇は、そういう本がたくさんあるんだそうですよ。そうすると、いつも机の上に置いて積んであるんだけど、星野が実際に侍従から聞いた話では、『昭和史の天皇』が行った時は天皇がいきなり箱から出そうとしたと。ところが、箱が設計ミスでビッチンビッチンで出ないわけですよ。それで、とにかくこうやって箱から出そうとして苦労していたという話を、星野は聞いて来て、「陛下ですら、あの本は待ちかねていたんだ」と。

伊藤 本当にあれ、どこかの巻がそうなんですけどね。他の巻はスッと出るんですけど、幾つか出ない巻があるんですよ。

松崎 出ないんですよ。そういうこともありまして、機会に恵まれましたら、またもう一度息を吹き返す可能性はあると思います。

伊藤 僕は、文庫にしたらいんじゃないかと思うね。

松崎 ただ、読売にはその覚悟はないでしょうね。

伊藤 いやいや、中公で。

松崎 どうなんでしょう。僕はNHKの文化センターへ行って話して、この 10 月から後期の授業が始まるからね。女性が 4 人、おばはんが増えているんですよ。その方達に、「なぜ高い受講料を出して、遠いところからこうやって集まって来てくださるんですか」と聞いたら、「私達、昭和の初めに生まれた者なのに意外と昭和がわからない。だから、それを知りたくて来た」と。大変ありがたいことですが、そういう意味において、たとえば昭和 20 年というあの激動の時、東京大空襲もあり。僕が新聞記者になったのも、3 月 10 日で家が焼けなかったら、親父の後を継いでしがらない町工場を経営していたかもわからない。みんな、それぞれに運命があそこで大変化しているわけです。

今度の新潟の地震で、同じようなことになる方が少なくないと思いますけれども、その昭和 20 年の 1 月から 8 月までに何があったのかということ、一般の人達が分かりやすい読物という語弊がありますが、史実に則って分かりやすく書いているものがあることは望ましいと思いますが、意外とそういうものをずっとまとめて書いてあるものというのは、あるようでいてないんですね。

伊藤 そうですね。ただ『昭和史の天皇』の場合は、クロノジカルじゃないんですよ。

松崎 はい。それをある方は、ブーメラン現象だと言うんですよ。パーンと投げたら、とんでもないほうへ行きながらまた元へ戻っていくという、まさにそういうやり方。だから、それは逆にいうと、われわれは頭からずっと意図的に筋道を立てて章建てを追いかけて行ったのではなくて、そこでさっきの桑野君が言ったように、大島さんを「やれ」というので、とんでもない話へパッと話が行く。そういうような足取りをとって、ブーメランになったんじゃないかと思うんです。

伊藤 それは別に悪いことじゃないんですね。

松崎 それともう一つは、これは自分自身がよく分かっているんですが、秦郁彦さんにも言われたんですが、「ノモンハンはやリングで、あれはもういいよ。その後の『日米交渉』はコンパクトで、よく出来ているよ」と、秦さんに言われたのは、その通りだと思います。こっちも、もうそれは覚悟の上でやったことですね。

伊藤 ノモンハンと「防共協定」の強化問題とは、しつこいぐらいやっているんですね（笑）。

松崎 そうです。これは、まさに僕自身がいちばんよく知っていることで、つまりどうしてしつこくなったかという、次の手を考えるわけです。次の手というのは、あくまでも『昭和史の天皇』のルールの上で考えるということと、やっぱり社内事情があるわけですよ。そういうものをバランスして考えて、「ここはもう少し押し、二押しして、頬被りしてやるかッ」というようなことでやったんですね。いずれにしても今から考えると、やっぱりあの中国のクレームはきつかったですねえ。もしあれがなかったら、『昭和史の天皇』はもっと別な展開をしていた可能性は、十分にあり得ると思うんです。

ただ、そういう方向で行ったんだけど望外にも、僕自身も分からなかったことは、あの戦争をやる時の“物動”が何であったのか、ということがだいたい分かったこと。それと、ノモンハンなるものが昭和史の戦争の中でどういう位置を占めていたのかということが分かった。このところが大きいのと、もうひとつはドイツとの関係が、意外と知られているようで知られていない。それにアプローチしたということ。第一次大戦後ドイツがものすごいインフレーションの中で、ある日突然パーンとして復活するわけです。それがいったい何だったのか。何故ドイツがあそこまで沈没して、何故第一次大戦後アメリカが一人勝ちのように大きくなったのかというようなことが、あそこら辺でなんとなく仕事をやっているうちに、自分でも分かってきた。

それから、これはまったくこれと違いますけれども、最近僕は生糸についてだいぶ関心を持っております。この頃新聞なんかで、女性の生糸に対する憧れというか、もう一度見直そうという動きがあって、昭和初期の銘仙とか、ああいう古着といいますか、その中に新しいデザイン感覚を発見して、生糸のすばらしさを見つけ出しているという記事が、この頃よく新聞に出るんですよ。それで、生糸ということに大変興味を持ちだしまして調べていくと、よく言われているように生糸は当時、日本の輸出、つまり外貨を稼ぐ大宗（大きな根本）であった、ということ言われるんですが、「じゃ、その大宗ってどういうことなの？」というので調べてみたところが、今から十何年前かな、安藤良雄さんのところで、「1930年代の日本経済の研究」というシンポジウムがあって、論文がたくさん出ているわけです。その中に一つだけ、生糸の話があるんですよ。

たまたまその本を、僕はそれこそ何気なしに本屋で買って持っていたので、それを見てヤヤッと驚いた。

ということは、たとえば昭和5年当時の生糸の輸出額と国家予算の額とを見ると、輸出して稼いだ外貨の額と、国家予算の中の軍事予算額がほぼ等しいんですよ。これを見て、愕然としたわけです。昭和4年のあのパニックが来る前のアメリカに行った生糸——アメリカは、世界から輸入した生糸の80%が日本の生糸なんです。残りは、中国、イタリア、それからもっと高級品がフランスだったということが分かってね。そうすると、あの昭和の満洲事変以後の戦争の、少なくとも昭和の初期の戦争というか、事変というか、そういうものの戦費、つまり鉄砲弾や大砲が生糸でつくられていたということも言えるんだらうと思うんです。

ところが、日本の外貨獲得のいちばんの手段であった生糸がパーンと完全にアウトになるのは何かというと、昭和13年に出来たナイロンなんです。そんなことが分かりましてね、生糸というものの昭和経済史の中における位置というものの重要性を再確認しましてね。そこから辺、もう少しきっちりまとめてみたいなと思っていて、もしいま『昭和史の天皇』があったとしたら、僕は生糸をやったでしょう。

生糸というと、すぐ反射的に『ああ野麦峠』というのが出てくるわけですよ。『女工哀史』ですよ。ところが、アメリカが世界恐慌で不況になると、「生糸はもう買えないよ」というのがごく普通ですよ。だって、生糸の消費者はアメリカの婦人、その婦人達が主として使っていたのは靴下です。ところが、それはもう買えないよということになる。そうすると、日本では輸出できなくなったら生産者は困るわけですよ。そうすると、何が起こるか。値段を安くせざるを得ない。ダンピングが起こるわけでしょう。そうすると、ダンピングのいちばんの被害者は誰かといったら、いちばん簡単なことは、いま日本の企業でも同じようにリストラですよ。それから、賃下げですよ。同じことが、生糸業者でも起こってくる。

そうすると、たとえば長野県の岡谷が生糸がいちばん盛んなところだったけれども、あそこの製糸工場へ来る女工さんの主な供給源は、木曾の山の中の女工さんなんです。要するに、野麦峠を越えてくる女工さん、この人達は早く言えば小学校もろくすっぽ出てないような女工さんが来るわけです。そうすると、技術力がない。そうすると、当然のことながら、その人達は給料も悪い。工場自体がそういうダンピングの中で、生活環境もうんと悪くなる。その前は、優秀な女工さんは月に100円稼いだというんです。当時の100円は、すごいですからね。今でいえば50万円以上月に稼いでいる。それからお盆とお正月には、生糸工場主はそれぞれ反物一反を女工さん達にやって、藪入りじゃないけど「故郷に帰っておいで」と。それから、お盆なんかの盆踊りは大変なものだし、それに目をつけている男工さんがワアワア寄って、いろんな面白い事件があったということもあるわけですよ。そういうふうには、生糸というものはもうすっかりわれわれの世界から忘れられて、生糸イコール中国ですよ。ところが、世界の最大の消費地であったアメリカがアウトになると、そういうふうになる。それから、ナイロンが出てくると、日本の生糸は息の根を止められるということですよ。

さらに言えば、僕がよく話をするとき言うんですが、いちばん最初に生糸なんて言わないわけ

ですよ。「皆さん、国定忠治というのを知っていますか」と。だいたいみんな知ってますよね。

「赤城の山で……かわいい子分のためえ達が……」という、ああいう新国劇の芝居がある。じゃ、なぜ国定忠治というアウトローが有名なの？ なぜ国定忠治が上州であれだけアウトローのパワーを持ったの？ いまの山口組みたいに、でかい力を持っているわけです。それはいったい何なの？ あそこら辺は生糸の産地なんですよ。繭の産地なんです。だから、金が動いている。そうすると、ちょうど国定忠治の最末期の頃、あの近所を繭種を売り歩いていたのは渋沢栄一ですよ。そのぐらい日本の経済と生糸、繭というものがドッキングしている。

それから、日本の戦時経済の前の時代に生糸が占めていた位置というのは、われわれの想像以上だったということに気がつきましてね。いまも、陛下はちゃんと稲を植えられる。それから、皇后は養蚕をやられるというのがちゃんと残っているわけです。ただ単に儀式としてではなくて、やっぱり日本人の生活の中に根づいていたものがあるし、もうひとつ言うと、日本で明治になってから官業の生糸工場がいちばん最初にできたのは、有名な富岡ですよ。そうすると、「何故富岡という場所につくったの？」という問題でしょう。もっと別なところでもいいわけなのに、なぜ富岡なの？ 逆にいうと、富岡でなければならなかったということです。ということは日本でも早く、幕末からオランダ商人を通じての外国との生糸の取引が始まるわけですが、そういう時に活躍したのが、やっぱり上州の生糸なんですよ。そして、殖産で生糸工場をつくらなきゃならないというときに動いたのは、伊藤博文とその下にいた渋沢栄一なんです。だから、富岡でなければならぬ必然性があるわけです。

てなことが分かってきましたね。じゃ、生糸というのをもう少しやってもいいんじゃないかと思うんですが、いま申し上げた安藤良雄さんの『1930年代の日本経済』の中の論文に、何という方だったかな。書いてあるのは、「この問題をやっている人は、ほとんどいない」と書いてあるんですよ、東大の先生がね。これもちょっと、われわれ現代史をやる者の手抜きりとか、落とし穴とかいうか、そういうことを僕は感じているわけなんです。

それはともかくとして、『昭和史の天皇』について何か質問をいただければ、ありがたいと思います。

伊藤 いまの絹の話で言うと、上州の絹商人の研究をしている人がいて、これはなかなか面白いですよ。

松崎 そうでしょうね。

伊藤 大きな商家の分析をやって、その人は議員になって、アメリカへの直輸出問題で法案をつくって、最終的にアメリカに潰されちゃうんですけど、そのことなんかをやっていて非常に面白い研究です。戦前の場合に、絹というのは一つのキーワードになるということは間違いないですね。

僕は、それと関連してもし質問するとすれば、『昭和史の天皇』は昭和 20 年までですね。でも、昭和史はそこから先 40 年ぐらいあります。そうすると、もし『昭和史の天皇』の戦後編を考えるとしたら、どういうテーマを、どこから始めますか。松崎さんだったらどういうイメージで考えるかなと、それに関心があります。なにも絹まで逆上らなくていい(笑)。いや、絹はい

いんですよ。戦後、日本が経済再建といった時に、やはり絹を考えているわけですよ。渡辺武さんなんかと話しているときに、ダレスがやって来て、「絹は昔ほどではない。だけど、やっぱりアメリカの女性の中に絹に対する憧れはあるんだから、多少は売れるだろうけど、これじゃ日本は食っていけない。だから、東南アジアに売れるものを考えなきゃいかん」というようなことを言っているわけですよ。だから、まだ名残りはあるんです。実際に昭和20年過ぎても、僕の田舎ではずいぶん、30年ぐらいまでかな、養蚕をやっておりましたね。養蚕小屋をつくって、繭を盛大にやっておりました。

松崎 いま伊藤ゼミでもって、「おまえ、どういうテーマがあるのか」というようなことを質問されたような感じがするんですが、僕が思うのに、日本は、農業国であった。それが重工業化するわけですよ。その重工業化した転機は何なのか。とすると、やっぱり当時の通産省がやった「産業合理化計画」が大きな起爆剤になって動き始めている。重工業化への道が進んでいる。その重工業化への道の経験、それからそこでの果実の残りが戦後にもう一度息を吹き返してきたから、日本は生糸という農業国にならないで、戦後の復興というのはやっぱり重工業化的な方向で進んでいった。そういう意味で、もう一度産業合理化計画というものを再認識していいんじゃないか。あそこら辺からニッサンが出てくるし、あの頃に日本の国産自動車が登場してくるし、幾つかの大きな具体的な例が出てきて、そして日本経済が質的に変換してくる。その質の変換点というものを、戦後のいわゆる講和以後の日本の経済のあり方、日本の政治のあり方、そういうものと睨み合わせてやっていいんじゃないか。

たとえばいま新潟県でも、あの地震でみんなひどい目に遭っているわけですが、小学校が避難所になって、そこに行っているという画面がたくさん出てくるわけです。ところが、いちばんひどかった山古志村の画面を見ても、小学校は実に立派な小学校ですよ、あんな山の中でも。あれはいったい誰がやったのか。極端にいうと全国津々浦々小学校なんていうのは、義務教育の校舎はすごい校舎を使っているわけです。それは、どういうことだったの？ まあ、道路はなんとなく分かりますよね。だから、あの教育問題の中での義務教育のレベルアップをどういうふうにやったのか、というようなことに私は興味を持っていますけどね。

伊藤 僕は、さっきの糸と重工業ということで非常にいま考えていることは、この間たまたま桜田武の史料を何とかしようということで、桜田さんの秘書だった人と会いました。それで、「日清紡というのが、いま何をやっていますか」と聞いたら、「実は、日清紡はブレーキで稼いでいます」「何のブレーキですか」「自動車のブレーキです」「何でそうなったんですか」「戦争中に民需から軍需へ転換が行われた。そのときに陸軍から、ブレーキの——これは三菱です——技術を移転した。そのブレーキを細々とやっていたら、それがだんだん大きくなって、いまや日清紡の稼ぎの4割はブレーキです」というわけです。だから、僕はおそらくあの第二次世界大戦の最中に民需から軍需へ変換したときに、新しい技術を移転した。あるいは、今われわれのオーラルヒストリーでもやっていますが、海軍の技術がどういうふう民間に移転していったか。軍が全部解体されたわけですから、ここにいた技術者は全部、民間に行ったわけです。それが、やはり非常に大きい。つまり、第二次世界大戦こそが戦後、高度成長の元だったと思うんですね。それを

きちんと、フォローしなきゃいけない。

松崎 だと思っんですよ。だから、いま糸に引っかけ——糸だから引っ掛かるんだと言ってもいいけど、かつて日本の製糸業でいちばん大きかったのは、岡谷の片倉製糸です。いま、片倉製糸というのは何になってるの？ 何にもなってないわけです。だから、いま言っただ清紡みたいになうまく乗り換える者もいたし、そうじゃなくて糸にしがみついていたのはおかしくなっちゃうということはあるし、それからやっぱり紡績なんかの関係だと、内外綿やその他の中国との関係もいろいろあるし。

だからやり方によっては、まだまだ昭和史の中での面白いテーマは発掘できると思っんです。ただ、問題はここに書きましたように、アンビシャスな心を持って、情熱を持ってやれるかどうかということだと思っんです。

伊藤 そうです。そんなものは出来まっすよ。

松崎 だけど私はもう、この年はだめです。

伊藤 私も、もうじきだめですけどね（笑）。まだ……。

松崎 僕が若い方にお願ひしたいのは、今までわれわれがやってきた路線の同じレールの上を走らないこと。自分で新しい見方、考え方をつくり出して見ていくと、面白いものがきつと出てくると思っんですよ。

伊藤 何かで決めてインタビューをやって、やっているうちに広がって、それで「もしかしたら、こっちのテーマのほうが面白い」という新しい視点がみつかるっていう、そういう効用も実はインタビューにはあると。

松崎 それを僕がいちばん痛感したのは、『昭和史の天皇』でやっっている吉野信次さんにインタビューしたことです。吉野信次さんという第一次近衛内閣の商工大臣をやった方が、もうとんでもないズーザー弁。

伊藤 これ、岸（信介）の親分ですからね。

松崎 そう、ズーザー弁です。俺は、テクノクラート第一号だ」なんて、えばってるんですから（笑）。それはそれでいいんです。おらなばハー」てな調子で話すんですから。

武田 親しみを感じまっすね。

松崎 それが、「日本の経済が大不況になっていく。その不況をどうやって克服するのか。それには、重工業化の方向へ行かなきゃならない」という方向を出すわけです。これね、安藤良雄先生がやっった吉野先生のヒヤリングで、『おもかじ、とりかじ』という本があるのをご存じですか。

伊藤 あるある。

奥 タイトルだけは。

松崎 これ読んでごらんないさい、たまげるから。「ああ、こうなのか」と思っますよ。これは、図書館にないかなあ。

伊藤 いえいえ、ありまっすよ。

松崎 どうして今、それこそ中央公論でも書店があれを復刻しないのか、僕は不思議に思っんです。あれは、ものすごくいい本です。あれを読んでみると、たとえばダットサンというもの

を、そもそも何故ダットサンと付けたのかというのも出てきますしね。ま、すごいものです、あの本は。

また、この吉野さんというのはすごい記憶力なんです。吉野さんのお話だと、蘆溝橋事件が起こって、その報告が入ってきてからすぐ閣議が開かれる。ところが吉野さんは、たまたま時間があいていたものだから多摩川へ散歩に行っているんですよ。連絡がとれないで、蘆溝橋が起こってどうするかという第一回の閣議に出席できなかった。そんな話だとか、結構おもしろい本ですよ。そういうふうに吉野さんにお目にかかったことによって、日本の重工業化のポイントというのはどこにあったのか。

たとえば、これはA4ですよ。それからB5というのがあるでしょう。これは、いつ出来たの？ A4、B5というのは。若い人、知らない？

伊藤 昭和5年ぐらいのね。

松崎 まさに、産業合理化計画の賜物なんです。つまり、その前は美濃判、半紙判、半裁という紙の大きさに言っていたわけです。それじゃあかんのだということで、A4、B5が出てくるんです。つまりそれまでは、日本のサイズは尺貫法なんです。そうしたら、これに猛反対が出てくるわけです。猛反対をしたのは、菊池……誰だったかな。猛反対をして、「伊勢神宮の鳥居のあれは何間何尺で、だから日本にはA4とかB5とかはだめだ」と言って、大揉めに揉めるんですよ。こんな話なんかも、僕はたいへん面白いと思います。われわれ、いま平気でこういうのをA4判と買って買っているんだけど、意外とこれ、昭和の産物なんです。

てなことを考えると、若いソフトな頭でもう一度昭和史というものを考えてみると、面白いテーマはまだまだ幾つも潜んでいると、僕は思うんです。

伊藤 皆さん、どうぞお話のいっぱい詰まっている松崎さんに質問してください。ちょっと質問しただけでも、グワーツという具合に来ますから（笑）、遠慮しないで。

奥 一つよろしいでしょうか。インタビューする時に、言っている方の話を聞くわけですがけれども、自分の中で「あ、それは違うんじゃないかな」とか、あるいは「この質問を言いたいんですけども、ちょっとこの質問をしたら悪いか」と思うことがあるかなと思うんですが、そういう場合、いい聞き方というのはあるのでしょうか。

松崎 きょうも四番目に書きましたように、自分で知ったかぶりという当てはまるかどうか分かりませんが、「私はこう思っている。だから、どうだ」というのをストレートに出さないで、それを何とか方向を和らげながら聞いてみるテクニックを覚えること。これは、オーラルヒストリーでは僕は必要だと思うんです。あまりにも直截的にストレートに聞きますと、相手は自分の長い間の経験と人生観があって、話の方向というのは意外と決まっている場合が少なくないわけです。そこへ若者が行って「いや、それはね……」なんてやると、相手はカチンと来るわけです。そこら辺は、だいたいインタビューをする相手の方は、自分よりも目上の方が多いと思うんです。だから、そこら辺をどういうふうにソフトランディング的に話を聞き出すかは、まさに8番目にあるように、ある程度経験を積むということは必要だと思います。それを「こうだ」というふうに物差しで計って、こうおやりになったほうがいいということは難しいと思います。

さっきの桑野君の話じゃないけど徐々に徐々に、最初は何かわからなかったんだけど、徐々にやっているうちに事実関係の厚みというか、そういうものがあって、そして最後には大島さんの亡くなった枕頭にいることができたというのは、まあ日本中探したって何人もいるわけじゃないです。そういうようなことができるまでの親近感とか。ところが学者の場合には、それがすべてじゃないわけです。いろんな人にヒヤリングをしていかなければならない。しかし、そういうような間柄になることを腹の中ではどこかに置いて、そして相手の胸襟を開かせるようなテクニックというか、タクティクスというか、それは自然に身につけていくより仕方ないと思いますね。

伊藤 そうなんですよね。それは本当にマニュアルに出来ないんですが、ちょっとおかしいんじゃないかなと思う時に私がよくやるのは、「え？……」ボディランゲージです。で、その時に聞かない。

松崎 先生がおっしゃったような、あれもタクティクスですよ（笑）。

伊藤 で、別の文脈で聞く。というのは、要するにいま松崎さんがおっしゃったように、その人は自分の物語を持っている。それを斜めから入っていくのはなかなか大変なんですけれども、入っていく方法はいろいろある。たとえば、今までの話の中に出てこないけれども、この人と非常に密接な関係があったはずの人間の名前を出すんです。

松崎 そうそう、それは大事ですね。

伊藤 「その人と、どういう関係でしたか」と、これでずっと別なほうに行きますから。ですから、物語は単一ではありませんので、投げ込んだ石に反応する、また別な物語がある。

松崎 そうです。

伊藤 こっちとあんまり関係ないことだってあるんですから。

松崎 たとえば『木戸日記』を見ていきますと、木戸（幸一）さんが陸軍の情報を取るのに使っていた——という語弊がありますけれども、木戸さんの陸軍のニュースソースは、井上三郎ですよ。じゃ、井上三郎というのはどういう人だったの？ これは、自分で調べていかなきゃならない。そこでもって、「ああ、井上さんはどういう方だったの？」と、その間に合いの手でポンと入れると、また話がぱっと広がるわけです。

だから、僕は木戸さんに五十数回お目にかかっているでしょう。まあ平たく言って、相手は天下の内大臣です。その方に五十数回もお目にかかることができたということは、相手も「ああ、この男ならば話してもいいや」というような気持ちをお持ちくださったから、会ってくださったと思うんです。やっぱりそこら辺の、一種の情熱でしょうねえ。ギラギラした情熱じゃなくていい意味の、ソフトな「やっぱり学問をやるぞ」という、そういうソフトな情熱じゃないでしょうかね。桑野君、何かいいあれがあれば（笑）。

桑野 私は、恐ろしくて反対なんかできませんでしたから、陸軍の人だったら、「海軍の人は、こう言っていますけれど」といって。

松崎 なるほどね。

桑野 反対に決まっていますから、海軍関係の……。それは、松崎さんが「聞け」と言ったことなんです。松崎さんが「聞け」と言ったので言っちゃったら、皆さん違うところに行っちゃい

ますから。「海軍の人はこうおっしゃっていたんですが、それについてどうですか」とか、その人に対して対向する、外務省の人には「陸軍関係の人はこう言っているんですけど、外務省の人はこういうふうには思っていらっしゃらなかったんですか」とかいう形で、誰かが言ったことにしちゃうんです（笑）。誰かは、たいてい松崎さんなんですが、私の場合（笑）。「これ聞け」「あれ聞け」と、だってさっきのお話じゃないけど決まっちゃって、「この言葉が出てくると、この話に来る」と、もう分かっているストーリーの中に割り込むには、某さんと言っちゃったらその人に悪いですから、「その関係の人が、こういうふうなことを言っていたんですけれども」と言うと、カーッと来て、バーッと喋られる（笑）。それを利用して。

松崎 だから、これは経験を積み重ねたタクティクスであると思うけれども、いま言ったように「じゃ、海軍の人はこう言っていますが」というのは、海軍の人が言ったということをなんとなく頭に入れてないと、それは言えないわけです。「じゃ、その海軍の人はどう言ったの？」と切り込んで来られたら、困っちゃうわけですよ。そこら辺の、やっぱり経験かなあ。

奥 ありがとうございます。

松崎 だから、分からないことは平気で、「それは分からないんですが」と言ったほうがいいです。僕が知っている国学院大学の現代史をやっている教授は、満洲事変でさっき言った柳井恒夫さん——あの人は外務省の東亜一課長か——に話を聞くのに、「こんなことを知らないで、柳井さんに話を聞くのは具合が悪いな」と思って聞かなかった。千載の悔いを残していますよ。

伊藤 知らないことは別段、恥ではない。だから聞いているのであって、せっかく向こうが力を入れて話してくださったことで、こちらは知っていることであっても、「あ、そうですか」と、やっぱり頷かなきゃならないですね。

松崎 そうそう、そう。

伊藤 初めて聞いたような顔をして。

松崎 昔からよく、「初めて聞いて驚いた。事実とすれば大変だ。早速調べて調査する」と（笑）。やっぱり何度も申しあげるけれども、若い人の新鮮な感覚で物事をもう一度見直してみるということは、幾つもあると思うんですよ。さっき、ここにいらしたかな、ノモンハンと張鼓峰のことを考えてみたいと。それなんかでも、ノモンハンで戦死した山県武光という歩兵第64連隊の連隊長がいるわけです。これは、「小松原日記」なんか見るとクソミソにやられているんですが、僕は、山県さんというのは陸士・陸大を出ているのに、秦さんの本で経歴を見るとドサ回りをやっているんですよ。「何でだろうな」というところに、僕なりのクエスチョンマークを打ちましてね。

で、山県さんの履歴を見てみると、ご存じのように陸士を出たあと各隊に配属されると、それが原隊ということになるわけです。その原隊が歩兵64連隊なんです。で、戦死しているのが64連隊。「これ、どういう関係？」ということですとずっと調べていくと、意外なことが分かってきます。というのは一言でいうと、大正の終わりと昭和の初めにやった「宇垣軍縮」、これが引っ掛かってくるのが分かりましてね。ははあ、面白いなと思って。その軍縮の煽りで、64連隊は一時なくなるんですよ。そうすると、原隊をなくした山県武光中尉はドサ回りになっちゃうわ

けです。そうすると、その中で山県さんの軍人としてのものの考え方が、かなり屈折していたんじゃないだろうか。

そういうものがノモンハンで——ノモンハンに行った64連隊は昭和12年の日中戦争開始後、新たに復活するわけです。そこにポンと復活して連隊長になった。そういうような、山県さんが軍人であったとしても、その前に人間であるわけです。やはり人間の成功した人、屈折した人、それはかなり投影しているんじゃないかなと思う。だから、誰か若い人が、「ノモンハンにおける山県連隊長の」というのは、それだけで一章がたつと思うんですよ。その軍縮までちゃんとリサーチしてやればね。まあそんなような、ものの考え方というのは単線ではなくて、かなり複線であると思うんですがね。

所澤 桑野さんにお伺いしたいのですが、大島大使のところへずっと通われた時に、録音したテープはだいたいどのぐらいの分量になられたんですか。それは、この3,000本の中に入っているんでしょうか。それが一つと、それから当時はテープを起こすというのは、具体的にどうやって作業されていたのでしょうか。

桑野 完全に起こしました。ですから、言われて大島さんのところに行きますね。話を聞いて、こんな大きいやつですから持って行って、会社へ帰ってくると即、起こすんです。本当に自分で起こすんです。

松崎 当時のテープは、こんなテープじゃなくて。

所澤 リールでしょう？

松崎 いやいや、カセットです。

桑野 A4ぐらいあるんです。

松崎 それがよくかったのは、スタートと止めるのが、わりあいこんな大きなキーだったわけです。そうすると、スタートをやって聞きながら起こしていく。ポンと切って、分からないところはもう一度スタートを入れなおして聞きなおす。だから、ヒヤリングよりも起こす作業は大変でした。ここに起こす方がいらっしゃるから、よくお分かりだと思うんですが、これはえらい時間がかかるんですよ。

桑野 話がめちゃくちゃに飛びますから、それを一応全部起こして、さっき言った食べ物の話とか何とか、要するに関係のない話を全部はずして、時間的にいちばん最初の話がこれで、二番目がこれだというのを今度、組み立て直して、起こしたノートからもう一つノートに、「防共協定」に関係したことを時系列的にきちっと書いて出すわけですね。だから、必ず一人の人にノートが2冊ずつ積み重なっちゃう。ランダムに話を聞きますから、まずランダムに全部、起こします。それを取材に行って聞いて来ては起こしてという、そんな仕事ばかりが。起こしている間に「だめ、もう一回行け」というと、その起こすのを途中で、また走って行くわけですね。

大島さんの場合には、私はこの中に全部入っていると思います。だいたい『昭和史の天皇』のテープは、よほどの方でない限り、私、最後までいたので分かるんですが、そのテープを個人が持つということはありませんでした。要するにテープを起こしたノートも、松崎さんに書いてもらうために渡す原稿も、全部皆さん置いて異動して行きましたので。

所澤 じゃ、そのノートも全部残っているんでしょうか。

伊藤 断片的だと思います。木戸さんのテープも、さっきおっしゃったほどの冊数はありません。大島さんのもそうです。

桑野 大島さんのは、少ないですか。

伊藤 少なくはないです。全体の中で言えば、非常に多いほうです。

松崎 すべてテープとノートが、きっちりパラレルになって残ってはいないわけです。つまり、その後のワーワーと『昭和史の天皇』をやめたドサクサの中で、いろいろと四散というところですが、かなり欠落した場合があります。カセットで何本ぐらいあるかな。

桑野 大島さんのですか。大島さんのは、記憶ないですねえ。

松崎 僕の口から申しあげたらあれですが、伊藤先生のところにはテープは行っております。

所澤 その頃、テープを起こすときに、だいたいどういう形にして起こしていくのかとか……、十何人の方はみんな統一されてやっていたんですか。

松崎 十何人いないですよ。

所澤 聞きに行った方がいらっしゃるわけでしょう。

伊藤 それは、前後して十……。

松崎 それは、総計。

所澤 その手分けして聞きに行ったスタッフの方達は、テープに起こして松崎さんに提出する時のスタイルなんかは、だいたい統一されてやっていたんですか。

松崎 いえいえ、それはないです。

所澤 それぞれ人によって全部違うやり方で？（所澤注：研究会終了後に桑野さんにうかがったところ、当時桑野さんが用いていた筆記具は万年筆だったということである）

松崎 違います。たとえば茶園さんが話して下さったことは、茶園さんの言葉のトーンでテープにあるわけですから、それをノートにする場合にはそれが出てくるわけです。その話のトーンはそのまま。あのテープは、われわれが使った最初は、ソニーのこんな大きいやつ。その次が、ちょうどこのぐらい（A4ぐらい）だったのかな。

桑野 そのぐらいでしたね。

松崎 このぐらいのやつが出て来たんです。だから、テープを起こすという意味では、いまのこんな小っちゃなテープレコーダーはやりづらいですよ。昔のほうがやりやすいな。いま、どういうふうに取り組んでいらっしゃる？

浅羽 トランスクライバーというものがありまして、足で踏んで操作しております。

松崎 ははあ、やっぱり違うんだ（笑）。全然違うんだ。

桑野 全然違う。ピアノを叩くみたいに、起こしてこんなことをやってはいないわけですか。

伊藤 それを足でやっているんでしょう？

浅羽 はい。キーもありますのでキーも押しますけれども、キー自体も結構大きいので。

松崎 ははあ、そういう新兵器があるんだ。

有馬 ポーズボタンを使うと、もう一回立ち上げるときに少しラグがあるので、一音落ちるんで

すよね、そのままやると。フットスイッチは、ちょっと戻ってくれるんじゃないですか。

桑野 わあ、いいですねえ。あの吉野さんみたいな訛りがある人を起こすの大変でした、もう(笑)。

伊藤 僕自身も起こしたことがあります、いちばん最初の頃は。だけど、フッと止めても先に行くでしょう。今度戻すと、戻し過ぎちゃうんですよね。とてもイライラする作業でした。

松崎 そうですね。だから、「そうだったのか」で止めるのと、「そうだったのかなあ」と、「なあ」が入るのと入らないとでは、話のその時の臨場感が違ってきちゃうんです。だから、その「なあ」までできるだけ入れるように心掛けてはいましたけれども、冗長になる場合があるので、それは削る場合もありますよね。若い時分、僕自身もずいぶん長いことテープ起こしをやりましたけど、これはいちばんしんどいですよ。

伊藤 話を聞いているときは、その場の雰囲気で分かったつもりでいて、実際起こしてみたら字にならない。

松崎 それはあります。

桑野 はいはい。なんて間抜けな質問をしているんだろうと(笑)。全然話の脈絡と合っていない。私、ちゃんと聞いてたのかしらって。こんな質問を受けたら……と思うぐらい、向こうがカチャカチャと話していると、「で、こういうことになるんですか」と、全然関係ないことを聞いているんですね。それを起こすときにわかって、申しわけないと思いました。

松崎 ところが、そういうノートが上がってくる。それを読んでみて原稿にするわけでしょう。そうするとこのところで、いま言ったようなことがあるのか、ないのか、やっぱり分かるわけです。「何をやってるの？ ここ抜けてるだろう。おまえ、もう一度行って来い」と(笑)。

有馬 ただ、起こすのは大変なんですけれども、起こさない。最後のところにお書きになっていらっしゃる「あるテーマのために行うものと、特定のテーマを立てずに」ということと言えば、たいがい僕らがやるときはこの中間ぐらいといいますか、その人のところに訪ねて行くわけですからテーマは当然あるんですけれども、しかし他方ではテーマには直接かかわりなく、その時に子どもの頃からの話をずっと聞いていくというのがいちばんいいですよね。あるいは途中で面白い話になってきたら、テーマとは別にそれをどんどん聞いていくといいますか。そうするとその部分は、特定のテーマを立てずに聞いているのと同じことになりますが、しかしこれをそのように使えるためには、全部を起こしてないと使い物にならないんですね。

松崎 それはそうですね。

有馬 だから、ちょっとそこら辺が大変ではあるけれども。

茶園 テープを起こすということで、ちょっと私も感慨があるんですが、私が被害を被ったという話です。私が安岡(正篤)さんに会いましてね、終戦の詔書で。あの方が非常に信用してくれまして、ドクターストップ 20分でお会いしたんですよ。私らの歳になると、話を聞く相手はみんな年下なんです、今ごろやっていますけど。だけど皆、先生だと思っているんですね。そこで頭を下げて聞くから、当時、安岡先生は私より相当歳はっていましたけど、わりに何でもいろいろなことを言われるんですよ。それはもうざっくばらんなことなので、「迫水って書記官長がな」とか、そういう言葉使いで話をされるようになって来た。そういう話のテープを1時間

20分録って、今も大切に持っているんですよ。林という秘書がついていて、彼がいろいろ世話をしてくれるんです。私が安岡さんの書いた「萬世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」などの原稿を見つけているものだから。

ところが安岡さんが亡くなった後でも、そういう打ち明け話を述べたのは私だけであると、みんな信じきっているんですよ。ところが、安岡さんが亡くなった翌年の3月に講談社の月刊誌『現代』が、「寂しかった黒幕・安岡正篤の『憂国と女』」というのを書いている。その中に、「テープを起こした」と書いてあるんですよ、ノンフィクション作家・長尾三郎氏が。そしてその中身は、「天皇が私の手を握って……」というような小見出しの話なんです。ものすごくでたらめなんです。無位無冠の安岡さんであれば、天皇が会ってくれるはずもないし、「手を握って、ありがとう、ありがとうと言った」など、あり得ないことです。だけど、平気で講談社がそう書いている。

それを林繁之という秘書が見て、私のところに電話をかけて来た——ものすごく怒るとるんですね。「これ、テープが起こしてある。テープはあなたしか持ってないんだ。安岡さんがこういうことを言ったのは」「あなた、何で長尾氏に貸したんか」と、ものすごく怒って来ましたよ。「全国1,500人の弟子がみんな怒って、僕のところに言うて来ておる。茶園ってなんだと」。テープの問題は私しか持ってないと思っているから。当然、私もびっくり仰天して、本屋からすぐ取り寄せましてね。読んでみると本当にその、でたらめが出ている！

どうしてかということには後にしましても、よく似通った言葉にはなっているんですね。テープの内容というのは、私だって、どこかの講演で若干人に話したこともあるから、あるいは聞き違いであるのかなど……。これは疑われると自分も疑心暗鬼になりますよ。ところが、絶対人に貸したり渡したことがない、厳重な約束ですから。「これはもう絶対に他人に聞かせない」という内輪話がだいぶ入っていますから。そうしますとね、長尾三郎氏の住所は調べたら分かったから、「あんた、あんなことを書いて困るじゃないか。あのテープは誰から借りたんだ。私は貸した覚えもないし、他人に貸したこともないんだ」と言うと、「いや、あれは講談社側からテープを起こしたのを送って来ました」というんですよ。「それじゃ、調べてください。講談社には誰がテープを渡したか」と、聞いたんですよ。

そうしますとね、やがて手紙が来た。まだ葉書を持っていますけど、「あれは、細木数子さんのテープです」と。細木数子さんは安岡先生の最後の奥さんですから、寝物語り式に喋らせている。当時、もう私の時よりだいぶ安岡先生は毫碌の気があって、確か八十三〜四歳でしたから。繰り返し繰り返し、同じことを繰り返すときがあるんですよ。それも出ている。そしてね、「迫水というやつが、うつ伏して慟哭しとったよ」ということとか、「それを聞いて、内閣総理大臣であった鈴木貫太郎が、僕が行ったときに『ありがとう、ありがとう』と言って手を握った」というのが出ているんですが、それが一ランクずつ上がっているんですよ。迫水さんの話が鈴木貫太郎になり、貫太郎の話が天皇の話になっている！（笑）

それは若い編集部の者が起こしたときに書いているんですね。それを長尾三郎氏は、「天皇が手を握って、安岡氏に、『ありがとう、ありがとう』と言った」とかですね。迫水さんだって、

天皇には直接挨拶はできませんから。「園遊会の時に、向こうに迫水が来ておったな」と天皇が言われたというので感激するぐらいの、まあ天皇ですからね。それが何一つわからないで講談社が書いたんですね。その事情が分かって私も安心して、細木数子さんに手紙を出したんですよ。

「あんた、勝手に安岡さんに言わせておいて、それを売り込んだと思うけど」と。まあ、返答は来ませんでしたけれどもね。近頃あの方は有名になったから（笑）。会って、この話をテレビでしようかなと思うたこともあるんですけどね。どうせ私が会いたいと言ったって、会ってはいくれないとは思いますが。

それで結局、林繁之氏は最後にそれが分かりましてね。私が「こう、こうだ」と言うと、「いや、よく分かりました。今度、東京に来た時に寄ってください」というので寄ったら、晩飯をおごってくれましたよ。そういう話で済んでますけど、何かのことできちっと書いておこうとは思っているんですけどもねえ。細木数子さんというのもよくテレビに出て、この間も花嫁姿のきれいな顔を出していたから、パチリと一枚撮ってあるんですがね。肖像権を侵したと、怒られるかも知れないけど……まあ、そういうことをいま思い出しました。

松崎 まあね、若い編集者、あるいは若い校閲者には、相対的に昭和史の約束事を知らない人が少なくないわけですよ。これは勉強していただきたいし、われわれももう一度勉強し直さなければいけないことだと思うんですよ。

茶園 芝居をしてる人なんかでも、たとえば軍隊なんかでもゲートルの巻き方を全然違うことで平気でやるとか、絵を描いたとき短剣を右にぶらさげたり、このあいだ見たら、鉄砲を左で持つての不動の姿勢がある。何故持っているかという、右手で敬礼せないかんからと。「これは、作り話よりひどいね」というようなことを言ったんですが。あれ、左利きの人でも必ず右で持ちますからね。

松崎 たとえば、テレビで昔の戦争時代のドラマみたいな、軍人が出てくると、その軍人が折り襟の軍服を着ている将校さんがいる。あるいは、肩章の軍人さんがいる。じゃ、折り襟はいつからだったの？ どういうことなの？ となると、まあテレビなんかは雑なものだから、そういうきちとした考証はしてないですよ。

茶園 していませんねえ。

松崎 まあ、いまのテレビは頭を長くした陸軍の将校さんが、結構平気で登場するから。

茶園 頭を長くした？ あれは諜報機関の人が多いです。防諜じゃなくて、諜報のですね。

松崎 先生、そういうことで。

伊藤 このオーラルヒストリーの一つの問題は、著作権の問題がありまして、これを議論し始めると大変なことになりますので、それはまたいつかの課題として、きょうは『昭和史の天皇』をめぐる、どういうふうにオーラルヒストリーがやられたかということ三回にわたって伺って、桑野さんからまた伺ったということで、終わりにしたいと思います。きょうは、お二人とも本当にありがとうございました。

松崎 どうも長いこと、三回にわたってありがとうございました。（拍手）

（終了）

